

一冊の本

横川・羽柴両先生の在りし日を偲んで

御手洗 一而

(賛助会員・川越市小堤)

羽柴先生が逝かれてからもう五年になる。いつか先生の思い出を書こうと思ひながら果たせず、そのまゝになつていた。盆を前にして、原稿の整理をしていると、羽柴先生と横川先生にかかわる一文があつたので、もう一度読み返しながら両先生を偲びたい。

次のように書き出してあつた。

「年賀状には、一年に一度の音信もなつかしいが、年をこしただけで、欲しくても永遠に手許に届かない年賀状のあることに気がつくとき、たまらなく寂しいものである。一人は中学生時代に、私にとって最初の歴史という勉強の手ほどきをうけた横川先生であり、もう一人は昨年物故された羽柴先生である。

その時、私はふと十何年前に書いた原稿を思い出しやうとの思いで古びた色の変つた原稿の集積棚から、目

的の原稿を探し出した。その原稿には、見出しに「一冊の本」と書いてあつた。

当時をふり返り、なつかしさと両先生の学恩に感謝しながら、両先生の御霊にこの一文を捧げたいと思う」

こう書き出してあつたが、少し整理しなければならぬ。文中に、昨年物故された羽柴先生とあり、先生は五十六年十月十九日に亡くなられたから、この原稿はその翌年書いたものと思われる。ちなみに横川先生は同じ年の十一月二十五日に亡くなられたことを、市川市在住の史談会員岩田周子さんに確かめた。そして、この「一冊の本」の原文は、その時すでに十何年前とあるから、今年から逆算すると二十年近く昔からの回想になる。

「私は今でもあの日の感動を思い出してぞくぞくする

ことがある。もう十二、三年前のことであるが、話は東京池袋の古本屋から始まる」

本文はここから始まっている。

暑い暑い夏の昼下がりであった。風のない日の東京はコンクリートに囲まれて全く暑い。私は池袋に出ると、立教大学前の古本屋に必ず立ち寄るのが習慣になっていたが、その日ばかりは目的が少し違っていた。暑さしのにぎに冷房を求めてとびこんだのである。

元来、本屋の前を素通り出来ない私は、頭の中で、東京中の古本屋の分類が出来上がっている。古本屋といえは神田周辺であるが、各大学の周辺には、それぞれ特徴のある分野によって古本が集積されている。池袋の周辺は、やはり人文科学や文学系統の本が多い。

その日はなんの当てもなかった。

暑さしのぎが一時間もたつと、びっしょりかいた汗だけはおさまった。求めたい本もなく、最初入った入口から反対側の出口まで一巡すると、そこには出口をおおうように未整理の本が積み重ねられていた。私はその中から大正本らしい製本を見つけ出し手にしたが、古いとい

うだけで手にとったその本は、「蘇峰随筆」とあった。足をとめて何げなく頁をめくっていると、折よく帰ってきた顔見知りの主人が、

「蘇峰の本ならその奥の棚にもあるはずですよ」

と、埋まった本をかき分けながら、引っ張り出してくれた。一冊はしみのついた上、下巻であった。「烟霞勝遊記」とあった。

私は表題から察して、旅行記であろうと思いつながら、主人の好意に報いるため、それとなく頁をめくると、丁度九州旅行記のところであった。大正十一年四月二十五六日の見聞記であったが、臼杵の文字が眼に入ると、急いで佐伯を探した。

あったあった。小田部町長の名と、矢野・藤田・独歩の顔振れも揃っていた。佐伯にすぎた養賢寺とも書いてあった。後日何かの役に立つだろうと求めながら、いつだったか、蘇峰の見聞記として、「佐伯史談」に大正時代の佐伯を回顧したのも、この本のおかげである。

その時、この二巻をぬきとって、櫛の歯がぬけたようになつた奥の棚に眼をやると、その隣に「横川末吉」の

名が突然私の眼に入った。

「ああっ」

私は驚きの余り声が出そうになった。私は夢中で背伸びしながらこの本を引っぱり出した。

「幕末維新の土佐の社会」

庄屋多之助の記録

高知図書館から出版されていた。

私は思わず抱きしめながら、あの時の感触は今でも残っている。

先生が佐伯中学に在職中、当時の中学生で先生を思い出さない人はいないだろう。アルさんこと横川先生は、赤禪でプールに仁王立ちし、水泳の先生として多くの名選手を生み、全国に佐伯中学水泳部の名を轟かせた。一方、地理・歴史の先生として、その特異の存在は生徒に人望があった。私の歴史の知識も、すべて先生に手ほどきをうけたものだが、郷里を離れてから二十年ぶり近く先生の著書との対面であった。先生のごときは、風の便りで高知に帰られていることは知っていたが、戦後私自身の苦学生時代が長かったため、すっかり疎遠になっていた。

その夜私は、とるものもとりあえず、長々と先生に手紙を書いた。一つには疎遠を詫び、現在一族の歴史小説である「巴の鏡」を脱稿し、藤田鳴鶴について興味をもち、後日、龍溪・鳴鶴・鶴谷の佐伯の大先達について、明治初期の青年時代の人間模様を書きたいと近況を知らせた。そして、先生が佐伯在任中、郷土史家として、すでに県下に名のあった佐藤鶴谷について、若干の質問をつけ加えた。

一週間程して、折り返し先生からの返書を受けとった。先生は私の中学生時代の印象を書いてなつかしかったが私が亡父のあとをつがず、歴史文学に興味をもっていることに驚かれた様子だった。ただしこの事は、後日「巴の鏡」を批評して載いて面目をほどくことができたのだが。そして、先生は高知へ帰り四十歳をすぎてから上京し、早稲田大学で二年間、再度経済史の視点から史学を勉強されたと近況を知らされて、全く頭の下がる思いだった。又、私の質問に対しては、一度佐藤鶴谷先生を中島町に訪ねたことがあるが、大分お年をとられていた上に、先生とは専門外の分野だったので、大したお話しもなかったと記されてあった。唯、一冊の本について、添

え書きが加えられていた。その本とは、先生自身書名は忘却したが、市の図書館で見つけた。鶴谷外史著の小説であること、そして丁寧な鶴城高校に郵送しておいたと註書があった。

私はこの手紙を戴いて、さすがに資料を大切にする歴史の先生だけのことはあると、感謝しながら教えられることが大きかった。と同時に、その本こそ私の求めている本であることを直感した。当時私は、龍溪・鳴鶴・鶴谷の資料を集めていたが、龍溪が「経国美談」を発表した時のベストセラーとなっていたことは知っていたが、鶴谷自身その頃の風潮をうけて小説を書き世に送り出したことを、鶴谷の自伝ともいうべき述懐で知ったばかりであった。

— 先生が小説と書いているから、「惨風悲雨世路日記」この本にまちがいない—
— とっさに私はそう思った。

その夜私は、恋人にでも会うような気持ちでなかなか寝つかれなかった。日頃、この本が佐伯にあるだろうかと思いつながら、佐伯にはまだ図書館がなかった。国会図書館行きを覚悟していた矢先だけに、先生のご教示が胸

が熟くなる程嬉しかった。思いこがれるといたたまれなくなるのが私の癖であるが、東京と佐伯との距離はさすがに遠かった。そして、次に帰郷の最大のチェックポイントとしてメモしておいた。

その頃私は、一族の歴史小説と並行して、藤田鳴鶴の資料集めに奔走していた。ところが、鳴鶴を知るには矢野龍溪を調べる必要があり、鶴谷との交友も判明した。そして調査の段階で、断片的に知り得たことは、彼等を知るためには、彼等を生んだ佐伯の土壌を研究する必要性を痛感したことだった。その結果、故里を知らないのに驚いたくらいだったが、維新から政党史を調べると逆に佐伯藩に及び、毛利氏を調べると佐伯氏の中世史の影がちらつき、歴史の関連性には際限がなかった。

— こりゃ史談会を頼るしかない—
— 私はそう思っていた。

その頃の佐伯史談会は、すでに中央でも知られていた。何しろ百号をこすガリ版機関紙は、全国でも特異な存在として高く評価されていた。その幹事が羽柴先生であった。先生のガリ版の技術と、地域社会に奉仕する情熱は

中央でも高くかわれていた。それまで私は、先生と二、三度お会いしていたが、先生の懐の中にとびこめる程あつかましくなかった。あつかましいというよりも、私自身の不勉強が、自然に先生との間に距離をおいていたように思う。そのために、次の帰郷の際には、先生に教えを受けなければというのが第二のチェックポイントとして急務であった。

こうした目的もかねて帰郷したのは、確か四十九年だったと思う。春闘のストライキの最中であった。一先ず竹野浦まで亡父の墓参を終えた私は、翌日母方の従兄を葛港に訪ねた。私は早速母の伝言を伝え、次の予定を話したが、現在商工会議所の会頭を勤めるこの従兄は、佐伯の人の動きに実に詳しく、こういう時は全く頼りにならなうて有難い。

「羽柴先生か。羽柴さんねえ、確か鶴城にいたんじゃないかろうか」

従兄は記憶を辿りながら言った。

「そいつは有難い」

思わず口に出た。

横川先生が送ったという佐藤鶴谷の一冊は鶴城高校にある。そこで羽柴先生にも会えるとなれば、一石二鳥ではないか。そんな考えが一瞬間をよぎった。私は挨拶もそこそこにとび出したが、後ろから従兄の呼び止める声がした。

「おい。今日は学校は春休みぞ」

「あっそうか」

私は一瞬はっとして右手で合図を送ったが、足は車庫の方へ動いていた。

休みであろうとなかろうと、今日という日ははずすことは出来なかった。滞在日数は限られていた。

鶴城高校は、春休み中でひっそりとしていた。伝統のある馬場の松は影をひそめていたが、四階建てのコンクリート校舎の偉容の方が先に眼に映った。昔なつかしい中学時代の木造建築の面影はすでになかった。

事務室には二、三人の職員がいた。

私が来意を告げると、一人の可愛い女子職員が、図書係の荒牧先生がお休みで残念ですとことわりながら、先に立って図書室まで案内してくれた。同窓の誼みとは

いえ、その親切にはのほのとした暖かみを感じた。

図書室は確か四階だったと思うが、私は階段を上がりながら、羽柴先生のことを問うた。

女子職員はしばらく考えていたが、

「羽柴先生は以前鶴城におられました。今は新しく出来た文化会館の方におられるのではないのでしょうか」と、教えてくれた。

図書室は、さすがに中学時代のそれとは比べものにならず、しんとした学習の場の尊厳を漂わせていた。私は一冊の本を探すのに懸命であったが、彼女も探してくれた。

「あるとすればこちらの本箱の方ですが」

彼女の声があった。

彼女の言う本箱は、ガラス張りでの別の列においてあった。私はふつう学生の読む本と貴重本と分類していると嬉しくなったが、それらしい本は遂に見つけることは出来なかった。

私はがっかりしたが、暫くの間、窓から戸外を眺めながら、中学生時代の思い出にふける一時を持ち合わせたのは幸であった。

彼女に礼を言いつつ、鶴城を出た私の足は、自然に三の丸に向かっていた。学校とちがって休みのない文化会館で、もし羽柴先生に会えればと、一縷の望みを抱きながら少々あせっていた。

山際の道はなつかしかった。養賢寺の前に立ち止り、一瞬入ろうかどうしようかとためらったが、断念して先を急いだ。独歩が下宿した坂本家の玄関の二階に思いをはせながら、子供の頃はもう少し道路の幅が広がったのだがと、昔の思い出がよみ返ってきた。

大田中で生まれた私には、その昔幼稚園へ通った道、亡父がよく暮らした片岡弁護士さんの邸へ使いた道、今年も年賀状を戴いた森神紫陽先生の書道塾もここにあった。昭和初期のことである。数々の思い出はつきなかつた。

そして、武家屋敷の軒並みを眺めていると、ふと毛利藩時代の風景が頭をよぎった。その昔、盲のびわ法師が城山にかかる霧を背景にこの道を歩くと絵になると思つた。二本差しの武士が肩をいからせて歩くよりも、びわを片手に、その夜の宿につく法師の後を追うように五月雨だれが落ちかかり、やがて番匠しぐれにさざ波が立つ方が

絵になる。詩が出来そうである。

ここに三義井の一つ、唾泉の井戸があるはずだが、
ところが矢野龍溪の生誕地、こんなことを考えていると
三の丸についた。

初めて行く文化会館は、それはそれは見事な偉容を誇
っていた。佐伯領を統治した毛利藩の役所のあとに、姿
をかえて、市民の文化会館が出来ののも歴史のめぐり合
わせかもしれない。

文化会館へ入って、玄関口で見覚えのある顔に出会っ
たが思い出せなかった。お互いに首をひねりながら軽く
頭を下げた。

「あのうー、私御手洗と申しますがー」

私はこの人も職員に違いないと確信し、来意を告げよ
うとすると、

「ああ、やはりそうでしたか。私後輩の菅ですがー」
と、名前を聞いてすぐわかった。

中学生時代絵を教わった菅先生の息子さんで、どこか
先生の面影があった。

私は早速立ち話で来意を告げたが、こんな所にも故郷

のよさがあった。ところで、皆さんが羽柴先生の消息と
いうよりも、その日の先生のスケジュールまで知ってい
たのには驚かされた。

「先生は暫くこの会館におられたのですが、今は市史の
編集にとりくんでおられます。今日はまだ編集室に居る
はずですよ。なにしろ忙がしい人ですから」

と、菅さんは時計を見ながら教えてくれた。そして編
集室のある建物まで丁寧に説明してくれた。

私があちこちを見廻していると、菅さんはどんちよう緞帳に菅先
生の著名な作品である「神の井」の構図が使われている
ことを話し、

「ご覧になりますか」

と誘ってくれたが、私は菅さんが話してくれた、羽柴
先生の所在について、「まだ」という言葉にこだわって
いた。「まだ」というくらいだから、間もなく羽柴先生
は帰られるに違いないと思った。私は無念にも緞帳の拜
見を断念し、次の機会に譲ることにして小走りに会館を
出た。

元気をとり戻した私は、今度こそと思いつながら、汗ば
む陽気に上着を脱いで、足早やになった。菅さんの教え

てくれた市史の編集室は、元の地警の建物の中であったが、その建物は一寸わかり難かった。私はもと来た道を引き返しながら、きよろきよろしていると、折よく向こうから郵便屋さんがやって来た。ところが、その赤自転車の郵便屋さんが、又子供時代からの知人であった。こんな偶然が幾つも重なり、帰郷ではなくて、徐々に故郷の人になってくるから不思議である。

建物は木造で古く、二階建ての一階が図書室として使われていた。だが、この図書室が図書館代りだと聞かされた時は情なかつた。一通り見廻したが、郷土史に関する分類もされていなかった。佐伯文庫の伝統が泣くと思つたが、腹立たしさよりも恥ずかしかつた。その時は、市の為政者たちは何をやっているのだろうと疑つたが、現在は立派な図書館が完成している。名誉のためにも書きそえておかねばならない。

私は係の人に編集室を聞き、羽柴先生の在室を知らされてほつとした。大分廻り道をしたが、とにかく間に合つてよかつたと思つた。

編集室にあてられた一室は、廊下をガラス戸で仕切つ

ていた。広さは四畳半ぐらいの小部屋で、あちこちに資料が積み重ねられていた。西側の日当りのよい部屋であつたが、その日は夏のように暑く、四月というのに古ばけた日除けのすだれが無造作にかけられていた。

先生は背を向けていた。そして右隣りに一人、入口に来客らしい老婦人がいたが、この老婦人は、その場の雰囲気から相当な知己であることがすぐ読みとれた。

先生は、戸の開いたのもわからない程、夢中で仕事をしていた。二人とも白のワイシャツ姿で、灰皿の煙草が静かにくゆっていた。仕事の内容が、市史の最後の校正であることはすぐわかつた。私は、先生の最後の合間を見計つて、簡単に来意を告げた。背を向けて、一緒に仕事をしていた人は佐脇さんであつた。二人はゲラのひき合わせにとり組んでいたが、私はその熱っぽい仕事ぶりにとまどいながら、その日の質問はやめようと思つた。

その時、先生の私を呼ぶ声が出た。

「御手洗君。そこらの資料は、勝手に見て下さい。なにしろ時間に追われているもんだから」

先生は、赤ペンで活字を追いながら、背中ごしに声をかけてくれた。

私が追っている一冊は、龍溪や鳴鶴の資料調査の一端であることや、中世佐伯氏を調べていることを、ちゃんと見通した上での助言であった。先生はそういう人である。心惜いばかりの配慮であった。

少し余談になるが、先生の見通しといえ、こんなこともあった。

私が浦代の高宮会員と先生の自宅を訪問した時のことである。ビールの御馳走になって歓談が続いた。先生は農民を圧迫した藩制時代よりも、佐伯氏時代の方が好きのように思われたが、私は惟治公が憤死した尾高知の地点について、かねてからの意見を話した記憶がある。

その時急に、先生は、

「さあ行こうか御手洗君」

こう言って、もう立ち上がっていた。

私は、どこに行くのか見当もつかず、唯唯然として先生の後ろに従った。

高宮会員の運転する車は、弥生町の磨崖仏、床木の供養塔、石で造られた井桁の井戸、ついでに柵牟礼山麓を廻って見聞した。愛宕神社には一気に駆けるようにして上がった。その早いこと、とても老人の足ではなかった。

「御手洗君。こゝらに城館があったといわれている。それからあの向かいの山に例の春好法師がいたというんじゃない」

私は先生の指さす方を見ながら、一言も聞きもせず、いと、先生の歩く方に従って歩いた。そして不思議に思った。

—私の見たい所、知りたい事をどうして先生は知っているのだから、拙著の「巴の鏡」に活かしていること

は言うまでもないが、限られた時間の中で、その場その時の願望を、行動で満たしてくれる配慮は、並みの人間では出来ない。人間の持ち合わせている知や智と健康な肉体は、時間を大切にして大いに活用したまえ、これが先生の無言の教訓であったとうけとめていく。

さて、その資料室にいた私は、この時とばかり、手当たり次第に資料を漁った。佐伯史談の創刊号から目次を拾ったが眼移りした。宝庫の中に身を置いた状態で大分興奮していた。短い帰郷期間に何をなすべきか、用意していた頭の中は、一ぺんに吹っ飛んでしまっていた。

柴田南華識の手筆による、鶴谷外史著の「禽獸會議」を見つけてメモしたのもその時である。火事場の何とやらで、あとになって、あれもこれも書きとめておけばよかったと、今思い出してもなつかしい。それ程無我無中であった。

その証拠に、先生が一段落して階下に下りられたのを私は気づかなかったが、戻ってこられた先生の手に二冊の本があった。

「御手洗君。これだよ」

先生は階下の図書室から、わざわざ持ってきてくれたのである。私が階下で見なかったのは、恐らく別の所に整理していたのであろう。その本は、「慘風悲雨・世路日記」と「新社会」であった。

横川先生から鶴城高校に送られた佐藤の一冊は、とっさにこれだと思った。

私ははっとした。装丁といい、表紙の色刷りといい、初版本のそれらしく古さの中に品があり、私はそっと本の表紙を撫でていた。

「長かったなあ、おまえさんに会うのが――
私は感無量の気持ちで一杯であった。」

小柄な先生は、立ったまま、私のしぐさじつとほほ笑んでおられた。その時初めて、私は先生の顔を正視した。柔和な顔であった。一つ一つの顔の皺が、歴史を刻んだ歴史の顔に映った。

私は端念に一枚ずつめくって、その感触を味わったがその時の感激は今でも忘れられない。

おかげで、矢野文雄著の「新社会」も手にすることが出来た。この本は、矢野龍溪集に所収されているが、茶表紙の真中に、黒の三文字で新社会とあしらった装丁はその素朴さと年月を経た古さとあいまって、原本でなければ味わえない重味さえ感じられた。

ふる里はここだと実感が湧いたのもその時であるが、話の中で、佐脇さんから、鳴鶴の養家の藤田家は浅海井の藤田家だと教わったのも収穫であった。鳴鶴の著書である「文明東漸史」など、佐伯でもなかなかないらしいが、せめて、新装なった市の図書館には、郷土出身者の著書ぐらい集めてもらいたいと願っている。

先生達の仕事が終って、短時間ではあったが、団欒の時間がもてたのは幸運だった。幾つかの疑問点も謎がと

けてほっとした。

私は佐伯水軍史にとり組んでいることを話し、その基礎史料として、御手洗文書について切り出した。

「先生。米水津の竹野浦には、佐伯惟定の感状が現存しているのですがご存知でしょうか。御手洗玄蕃の慶長高帳も現存しているのですが―」

先生は驚いた様子だった。

「へえっ。そげんもんがあるんか。そいつは見にいかんといけんのを」

佐伯弁が何とも心快かった。

この文書は、後日改めて佐伯史談に発表され、中世佐伯氏時代の貴重な資料として世に出ることになった。

話ごと切れたところで、今まで黙っていた老婦人が、「先生。あの時の鉄道唱歌の歌詩は間違っていました。これがほんとうですよ」

と言って、急に節をつけて歌い出した。

私は突然のことで驚いたが、歴史の資料は、一つずつこうして作りまとめられるのかと、つくづく感心し、現実には歴史の時間の中にあるような気がした。

間もなく、この老婦人は先に席を立たれたが、帰り際

に、「いっちゃん」と、はっきり私の幼名を言って別れの挨拶をされた時は、私は再び驚かされた。

この老婦人は、故山田平之丞翁の奥さんであった。道理で見覚えがあると思った。思えば、米水津村誌や米水津郷土ものがたりを残してくれた山田翁は、亡父と同じ竹野浦の出身であった。

ここにもふる里があった。

夕方近く、先生や佐脇さんと別れる時、私は両手に抱えるほどの古書や資料をお借りして帰った。その晩から一週間の滞在を利用して、徹夜の読書が始まった。

「啼鴉曉を報じて旭日未だ昇らず、宿靄野をこめて六字決もうと、西空尚は残斗の輝くを見る宏壮なる一大厦中、車窓僅かに白ふして四隅未だ明らかならず、満堂寂げき唯だ時器の一隅に分秒を刻するを聞くのみ」
佐藤の一冊の書き出しである。

考えてみれば、横川先生の手紙から端を発し、帰郷した一日、高校から文化会館、会館から市史編集室と、一冊の本を追って、偶然にもこの日羽柴先生に会うことが出来た。好運であった。

そして今、あの人の顔が浮かんでくる。その日の一日、余りにも印象が強すぎて、生涯忘れられない一日になった。

春光うららかな春の陽気にしては、汗ばむほど暑い一日であった。

後日記

昭和五十三年三月、私は「巴の鏡」応永一明応編を出版した。一番喜んでくれたのは両先生であった。

横川先生からは、豊後水道の描写と和船の研究について評価を戴き、羽柴先生には、ぼう大な資料を駆使した。正確、独創の考証と適切なご批評を戴いた。

そして五十六年春、続く明応一天文編を脱稿し、発刊を秋に予定した。夏の暑い頃、私は二稿、三稿と校正に追い廻されていた。

しかしその頃、羽柴先生は病んでいた。あとから考えると、横川先生も同じ頃臥せておられたのではないかと思われる。

羽柴先生については、機関誌でその近況が知られるので有難かったが、私なりに心配になることがあった。

それは、大分大学富来教授の論文、「海部考」以下、「豊後水道の地位」「漁村の社会構造」等、問い合わせた論文について、連絡がなかったことである。忘れるような先生ではないんだがと思いながら、その頃は大した気にもとめなかったが、八月の終り頃、依頼のコピーの中に、長文の手紙が入っていた。

そして、梅雨頃入院されていたことがわかった。

「やっぱり年ですな。九月十九日で満七十六歳になるのですから『ちったあ年う考えんといけん』と教え児あたりにたしなめられます」

ここまではよかったが、三か月近く寝たり起きたり、そんなにわるかったとは知らなかった。

「しばらく机について物を書くとは汗ばみ、横になった方が楽といった具合ですから、当分ご容赦下さい」

ここまで読んで、私は先生に無理なお願いをしたと後悔した。そして先生に対する甘えが、いつまでたってもぬけ切らないと恥じた。

私は先生の手紙を読んで、ペンの勢はある、字の乱れはないが、心なしかいつもと違う老人の字に見えた。そして、「当分ご容赦下さい」にひっかかった。

悪い予感が走った。

この手紙だけでも便箋に四枚、大へんな負担をかけているのに、先生はご自身の健康に、いつもとちがう異変を感じておられた。

翌日、私は早速非礼を詫び、長々と佐伯弁で激励の手紙を書いた。そして以後、片道通信を送ると書き添えた。旬日を経て又葉書を送った。書かずにはおられなかった。

「夕、先生と楽しい団欒の夢を見た。来春といわず第二巻の出来次第帰郷したい。又適切な批評を聞かせて下さい。病は気からと言います、気張って下さい」

それでも胸騒ぎがして電話を入れたが、空しいベルの音だけが響いた。翌日も同じだった。ただならぬ気配が脳裏をよぎった。

その頃、先生は病院のベッドに横たわり、神のお召しを待っていた。そして十月二十日、帰郷していた姫野会員から先生死去の一報を知らされた。

私は一瞬茫然自失、気のぬけた風船のように放心状態になった。見舞もかなわず、余りのあっけなさに涙も出なかったが、それから書斎に入ると自然に涙があふれてきた。

どうしても読んで戴きたかった「巴の鏡」の続巻は、予定より遅れて十二月の初めに完成した。私は羽柴先生には帰郷の時に御霊前に捧げることにして、早速高知の横川先生に発送した。

ところが、先生からの連絡がないばかりでなく、暫くして書籍小包が返送されてきた。私は、再び悪い予感がして、その場に立ちすくんでいたが、子供さんの所に旅行ではないかと思うようにした。だが、追っかけるようにして、岡山県気付けの奥さん名義で、年賀欠札の挨拶状を受けとった。横川先生との別れも決定的となった。

先生は私の訪問まで待ってくれなかったが、それよりも、先生のご病気を知らない私の方がうかつだった。あれ程、続巻を楽しみに待って戴いたのに、その夢もかなわず、時の流れに無情を感じたことはなかった。

せめて、この一冊だけでも学恩に報いたかった。

私は同じ頃二人の師を失った。しかし、両先生の美しい生き様は、私に有形無形の教訓を与えてくれた。生前のご教導に感謝しながら、又両先生について、書ける日の近からんことを祈っている。

郷里の先達佐藤鶴谷翁の一冊のおかげで、両先生の交友の中に割りこんだ私は幸運であった。

両先生から受けた学恩とご慈愛は、終生忘れることは出来ない。今となつては唯々ご冥福を祈るのみである。

会員の著書紹介

巴の鏡 天文―天正編 御手洗一而著

まず、大分合同新聞の書評を紹介することにしよう。

「御手洗一族物語」と副題にあるように、南海部郡に本拠を構えた御手洗氏の歴史を綴った大河小説。著者は佐伯市出身で川越在住。

御手洗一族はもと伊予国大三島領の御手洗島に住んでいたが、応永二十二年（一四一五）安芸の小早川勢に追われ、一族四十一人は船で瀬戸内海をさまよった末、豊後佐伯荘の米水津湾に無断侵入、ここを安住の地として佐伯氏に仕えた。このいきさつは「応永―明応編」に描かれ、つづく「明応―天文編」で佐伯惟治とその滅亡の歴史がたどられた。

この編では大友二階崩れの変から始まり、宗麟と佐伯惟教との関係を中心に描かれる。青年時代の宗麟は国衆を毛嫌いし、大神出の佐伯氏は伊予へ亡命しなればならず、御手洗一族もその余波をこうむった。

御手洗一族を通じてとらえられた大友宗麟が興味深い。と評されている。

私は、この本を四百年間佐伯地方を統治した佐伯氏の歴史書として興味深く読んでいる。主家大友氏に殉じて伊予に去った佐伯氏を語る本は「柵傘礼物語」があるがこの本だけでは物足りない。「巴の鏡」はよい佐伯氏の歴史書でもある。

会員のご一読をおすすめする。

定価二千二百円、史談会で取次ぎます。史談会員には特典あり。著者署名入り本は残部六冊限り、特別に署名してもらったもの。
(塩月 記)